

私は、もう二〇年ほど京都に住んでおり、今朝早く京都をたつてやってまいりました。台風一過、非常にさわやかな日に恵まれました。つい二、三日前までは台風一二号が吹き荒れ、特に紀伊半島に甚大な被害を与えました。台風による「深層崩壊」という初めての言葉も知りました。死者、行方不明者が一〇〇名を超えたと伝えられています。その被災地の心臓部というべき最南端の新宮市には毎年のようにいつておりますが、この度も大変な被害を受けたようです。

三月一日の東北地方を襲った大災害のとき、その新宮市には津波がおそってきませんでした。そのことは土地の人々は予想できたといっておりました。お隣の田辺には津波が押し寄せたということを知りましたから、今回の台風で新宮市は大丈夫かなと思っていましたら、むしろ熊野川のほうが氾濫を起こして大変な被害を受けてしまったといっておりました。自然はほんとうに恐ろしいということであらためて感じさせられたのであります。

東北は私のふるさとの地です。三・一一の災害が起こってから一か月ほどたった四月一日、一七日、一八日に、伊丹空港から山形空港に飛んで車で仙台にはいり、東松島、石巻、三陸海岸にでて沿岸地域を北上して気仙沼までまいりました。ご承知のように、破壊の爪痕、瓦礫の山また山でした。ほとんど言葉を失い、ああ地獄だ、と思いました。賽の河原とという言葉があったなど。その地獄にはもう仏の影がさすことはなかった。賽の河原に地藏菩薩が立つ気配も感じるできませんでした。よく、自然は文明社会を脅かすといわれておりましたが、その言葉を超えて自然が自然そのものを破壊する、その恐ろしさに慄然としたわけです。

ところが、あわただしい三日間の旅のあいだじゅう、まことに皮肉にも、空は晴れわたつて、海が風いでおりました。美しい大海原が水平線の彼方に続いていました。振り返ると、瓦礫の山々の彼方に、美しい山並みがどこまでも続いておりました。そのとき思つたんです。人間、あるいは、日本列島に住む人々は、自然の恐ろしさ、自然の猛威によって打ち砕かれるが、究極的にはその自然の奥深い美しさ、優しさによって救われる。そう思わないわけにはいかなかったのです。自然のもっている二面性といったらよいのでしょうか、その二面性と何千年ものあいだ日本列島の人々はつきあって、そして、生き抜いてきた。そういう思いが胸にこみあげてきました。

その一方で、無数のご遺体が海に流され、山や野に放り出されておりました。私はそのご遺体をまともにもみることはありませんでした。それは報道やルポルタージュなどを通して実感するほかはなかった。けれども、その無数のご遺体といえますか屍が、山野を埋め尽くしていると想像したとき、ご遺族の方々、ご遺族に関連する方々が、どのようにして精神の安

定をえられるか、鎮魂の確信をもつことができるのだろうかという思いにとらわれたのです。

そのときに自然に浮かび上がってきた万葉時代の歌があります。大友家持の「海行かば水浸く屍 山行かば 草生す屍 王の辺にしこそ死なぬ かえりみやせし」です。戦争中多くの人々が戦争にかりたてられて戦場に赴くとき、ときの国家はこの歌を毎日のように流しておりました。私も少年のころ毎日のようにラジオから流されてくるこの歌を聞き、歌い、そして、あの時代を緊張に包まれて生きていたような気がします。『万葉集』のなかの挽歌、死者を悼む歌のなかでもっともよく知られた古典的な歌です。

作曲家、信時潔はおそらく近代日本が誇るべき優れた音楽家の一人だと思えます。またこの歌は名曲として歴史に残されていくと思っております。ただ、敗戦後この歌はほとんど歌われなくなりました。戦争と軍国主義の記憶に深く結びついたこの歌は、戦後、忌避されてきました。どこからもその歌声は聞こえなくなりました。しかし不思議なことに、家持のその歌が、かつて身に染みついてきたメロディーとともに、被災地に立ったとき浮かび上がってきたのです。なぜだろう。いふかりました。家持は、無数の人々の遺体が野に山に海に投げ出されなければならない時代を生きているなかで、死んでいった人々の魂が屍から抜け出し、遊離して、海、山に鎮まってゆく、そのことを信ずることができた人間だったと思えます。

万葉の古代人は、ほとんど例外なく、『万葉集』のなかで詠んでいる挽歌を通して死者の鎮魂を行っていました。魂のゆくえに想像力を及ぼし、そのことにかき立てられるように生きていました。

家持の歌には「屍」という言葉しかでてきません。しかし、それを言葉にした人々は、屍の彼方に屍から遊離した魂の軌跡を想像することができた。そのことが、あとに残された者のこのころの平安を取り戻すために重要な意味をもつ観念だったのだらうと思えます。

しかし今日、この私を含めて、魂のゆくえに想像力をめぐらす能力といえますか、そのような精神の可能性がぎりなく希薄になっています。このことは近代そのものの問題なのかもしれません。われわれの近代がそのことを準備していたのかもしれない。そのジレンマの前に立たされているのが、被災地における被災者の方々の現実ではないでしょうか。そしてわれわれ日本人の現状ではないかという気がします。

石巻では広いサッカー場が緊急の埋葬場にかえられて数百ものご遺体が仮埋葬されておりました。土葬です。やがて改葬して火葬にしたいという方々のお気持ちも報道されました。私も現地でそのことを何度か伺いました。しかし火葬にして、はたしてそれで鎮魂の儀

はおわるのでしょうか。

『万葉集』のなかの歌の半分は挽歌です。死者を悼む歌です。その死者たちはほとんど異常死をとげています。戦乱による死、刑死などの事故による死者がほとんどであることに注意しなければなりません。そのなかには自然災害による死者も非常に多かったと思います。万葉以来千年、さまざまな災害によつて命を失った方々を鎮魂するためにあの挽歌が詠われた、そういつてもいいようなところがあります。日本列島千年、あるいは二千年、三千年の歴史が、大災害とのつきあいの生活のなかで生み出されたものであることが、なんとなくわかるような気がしたのです。

深刻な災害にあつて、心的な不安症状に苦しむ人々がたくさんおいでになると思います。これからますます増えていくだろうと思います。そういう方々にどういふ支援の手をさしのべたらよいのか、それがわれわれ社会の重大な問題になつております。PTSDという言葉がよく使われます。心的トラウマ後ストレス不安障害といった意味だそうです。たしか、一六年前の阪神・淡路大震災のころから使われだした言葉です。そのような不安障害に苦しむ人々にどういふ支援の手をさしのべるのか。

そこでいわれだした考え方の一つに、人と人の絆をつくり、地域との絆をとおして支援の手をさしのべるという考え方があります。その考え方が一般的になつてきました。それはそれで重要なことですが、私はそれだけではもう一つ足りないのではないかとずうっと思つていました。それは、死者と生き残つた人間たちとのあいだの絆です。いわば人と人との絆を水平的な絆と考えると、死者との絆は垂直的な絆といつてよいかもしれません。死者との絆を打ち立てることができないうちは、最終的なところの平安はえられないのではないか。そのことは、被災地で無数のご遺体を前にしてなすところなく杲然と立ち竦むほかない近代的な人間の寂しい姿と重なるのです。人間関係という言葉があります。対人関係という言葉があります。それと同時に、魂との関係がもう一つ存在するのではないか。私はこれを対魂関係と呼んでおります。対人関係に対して対魂関係。死者と生きている者との縦の絆。そういうことをあらためて考えなければならぬ時代にきたのではないのでしょうか。

それにしても今度の東北地方、特に沿岸地域における被災者の方々の表情は非常に穏やかでした。行動も思いやりにあふれ、忍耐強く沈着冷静でした。

そのことについて海外からさまざまな賞賛のメッセージをいただいています。しかし、あの災害現場における被災者の方々の穏やかな表情は、阪神・淡路大震災のときもそうだったと思います。そのあとの新潟県中越地震のときもそうだったと思いますね。それは東北地方